

母親面接をめぐる覚え書き

高石 浩一

最近、院生たちのカンファレンスを聞いていて、「これはいけない!」と思うことが増えた。中でも本来比較的経験値の高いはずの博士後期課程の院生たちの発表に、違和感を覚えることが増えている。その最も大きな要因は、彼らが博士前期課程の学生たちと組んで行う母親面接の発表を耳にすることが多いからであることに気づいた。母親面接は通常の面接以上に、メタ認知を必要とするより高度な面接技術が求められるばかりでなく、数年のアドバンテージではいかんともし難い、心理臨床初学者の陥りやすい陥穽が口を開いている。そこでカンファレンスの短い時間の中ではまとめて伝えることの難しい、筆者の考える母親面接にまつわるエッセンスを以下に考察してみたい。

<母子並行面接の構造（入れ子構造）>

上記のように、母親面接はメタ認知を必要とする、より高度な面接である。もちろん、通常の面接でもメタ認知は必要であるが（神田橋；1990）、とりわけ母子並行面接の場合、目の前にいるクライアントである母親と、子どもと子供担当者の面接への配慮や全体構造を把握する目、何が起きているか、どのようなダイナミズムが働いているかを観取する目が必要となる。これは構造的に言うと、以下のように図式化される（図1）。

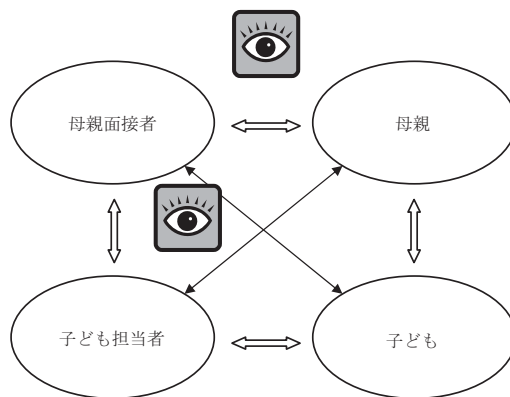


図1 母子並行面接の構造

ここで重要なのは、母親面接者がクライアントである母親のみならず、母子のダイナミズム、さらに子どもと子供担当者のダイナミズム、そしてさらに自分と子供担当者の間のダイナミズムにも開かれているということ、要するに何が起きているか、どのようなダイナミズムが動いているかを気にしているということである。時には、母親から子供担当者に、時には子どもからダイレクトに母親面接者へのアプローチすらあるかも知れないが、その場合でもこの四者全体のダイナミズムを視野に入れたメタ認知ができるかどうか、母子並行面接の要諦になる。

具体的にはどういったことが問題になるだろうか。たとえば以下のようなビネットを取り上げてみたい。

事例①

母親面接者と子ども担当者は、毎回プレイセラピーと面接後に話し合いをし、お互いの情報交換をするのを常としていた。ある時、子ども担当者が「そろそろ全部報告しなくてもいいと思うんですけど…」と言い始めた。母親面接者が「え？ どうして？」と問うと、「いや、先輩はプレイの内容は全部聞くけど、親面接の内容は全然教えてくれないじゃないですか。だから私も、あまり言わない方がいいかなとも思って…守秘義務のこともありますし…」と答えた。母子並行面接におけるセラピスト同士の話し合いの重要性を主張する母親面接者と、情報の不均衡を盾に情報提供を拒む子ども担当者との間の亀裂は埋まらず、以降面接後の話し合いは持たれないまま、母子並行面接は続いていった。

この事例の場合、最も重要なことは、この形でも母子並行面接は続くということである。こうした事態が起こるのは、多く母子分離がテーマになっている事例の場合である。子どもは母親に内緒の遊びや話題をプレイルームで展開し始め、一方母親の方も子どもの出生にまつわる夫婦間の葛藤など、子どもに直接言えないような様々な話題を面接室で始めていたりする。それまではどうということもなかった母親面接者と子ども担当者との仲が妙にギクシャクし始めるのは、おおよそこういうタイミングである。ここでむやみに両者を取り持つ方向で周囲が動いたり、あるいはいずれかの意向に沿って他方を説得しようとするのは間違いである。冒頭に記したとおり、この形でも面接は続くし、またその方が結果的に近道になる場合も少なくない。母子分離はそれぞれの担当者同士の不和を準備し、それを深める傾向があるからである。表面上情報共有が行われていても、こういった面接では子ども担当者は本当に起こっているこ

とをカムフラージュしたり、無意識的に伝え忘れたりするようになる。また、事態を全体的なダイナミズムから見ることでできる母親面接者は、薄々そうした事態に気づいていても、とやかく言わないものである。

むしろ問題は、こういったやり取りのないままに、いつまでも濃厚な情報共有が行われ、いわば双方の面接やプレイの内容が筒抜けになってしまっている場合である。これが独立した意見を言い合える間柄で行われているならば、さほど問題視しなくても良いかもしれないが、往々にして母親面接者主導のもとに情報共有が行われ、いわば母親の子供取り込みに共鳴する形で、母親担当者が子ども担当者を抱え込んでしまう場合が最も害が大きい。こうなると母子分離はお題目だけになり、母親面接者の庇護のもとで子ども担当者が全ての情報を報告して指示を仰ぐ形になり、クライアントの母子関係がそれに準じて、結局いつまでも母親にからめとられた母子並行面接が続いてしまうことにもなりかねないからである。

重要なことは、母親面接者はこうした構造を知っておくということであって、構造全体をコントロールすることではない。母親面接者が子ども担当者を信頼し、その独自の展開（知悉しなくとも）見守ること、内部にまで踏み込んで守るのではなく、外枠を強化して守ることが大切である。具体的には、母親や母親面接者の都合による日程変更や時間変更を避け、できるだけ子どものペースに合わせてプレイセラピーや面接を設定すること、プレイや面接の詳細に踏み込んで意見するのでなく、子どもと子ども担当者のペアをユニットとして見立て、何が起きているのか、次に何が起こりうるのか、どちらに向かおうとしているのかといった観点から考察すること、要するに親が子を見守るように子どものプレイや面接を見守ることが、母親

面接者に求められるのである。

＜初学者の母親面接者が陥りやすい陥穽＞

さて、おおよそこういった全体構造を理解していたとしても、あるいはそれ故に却って、母親面接者が陥りやすい陥穽は幾つかある。実際の面接場面で起きやすいのは、母親面接ができない母親面接者になってしまうという事態である、以下に幾つか具体例を示しながら、母親面接者の留意点を取り上げていくことにしたい。

事例②

毎回、子どものセラピーの様子を教えて欲しいと申し出る母親は、プレイセラピー終了後のあるセッションで、居たたまれずに子供担当のセラピストに向かって、「今日はどうでしたか？」と直接問いかけた。これを見ていた子どもはすかさず「内緒だよね～」と子ども担当セラピストを見上げた。「すいません、内緒です」と答える子ども担当セラピストの後を受けて、「ま、いつも申し上げている通りですよ」と母親面接者もフォローした。

翌週、母親は仕事を理由に面接をキャンセルし、以後結局面接は母子共に中断となった。

この事例の場合、母親面接者は子どものことは何でも知っておきたいと主張する母親の欲求を問題視し、できるだけ子どものプレイセラピーにおける展開を直接には語らず、抽象的な表現で母に伝える努力をしていた。その意味では、一見母子並行面接全体の構造を見通した上で適切な対処を行っているように見える。それではなぜ中断に至ってしまったのだろうか？これは端的に、母親面接者の母親に対する共感不足が原因である。簡単に言ってしまうと、母親面接者は母子並行の治療構造を大切にすあまり、もう少し明確に言えば子どもと子ども担当

者のプレイセラピーを大切にすあまり、自身のクライアントである母親への慮りが十分ではなかった、と言える。この事態が起こるまで、母親は繰り返し母親面接者に子どものセラピーの様子を教えて欲しいと訴えていた。母親面接者はこれを、子どもを支配したがる母親の病理と見なし、その意味ではこの訴えの背後にある気持ちやこだわりを十分配慮できていなかったことが覗かれる。もちろん、母親のその要求に応じるべきであったというのは論外である。

このビネットを通して伝えたかったことは、特に初学者の母親面接者は、往々にして子どもの側に立ちがちだということである。精神力動的に言うなら、母親面接を行っているうちに治療者は自らの子ども部分が触発され、子ども転移を引き受けがちだ、ということになるだろうか。つまりその母親に対する子どもとして、子ども担当者や子どもの気持ちを代弁したくなり、母親の側に立つ見方が困難になるのである。

事例③

小学4年のある不登校の子どもは、何故か秋以降学校に来にくくなったと子ども担当者に語った。一方母親面接では、もともとの夫婦仲が非常に悪いことが語られた。「その上この子がこんな状態になって…この子だけが頼りなのに…。」そう肩を落とす母親に、「いや、ひょっとしたらそういった御夫婦の問題が、不登校の引き金になっているのかも知れませんね」と母親セラピストが返すと、「いえ、でもこの子の前では決して喧嘩はしてませんから。この子は本当に優しい子なんです。疲れて動けなくなってる私の代わりに、夕食を作ってくれたりするんですから…それに比べると夫は私の苦労など耳も貸さず、全部私のせいにして、自分だけ仕事だと言って外に遊びに行ってしまうんです」と、母親は夫への不満を募らせるのだった。そ

の不満はやがて母親面接者にも及び、「私の苦
 労が分かってもらえない…」と面接を辞めてし
 まった。

こういった事例の場合、全体のダイナミズム
 を見通せば、子供が悪化した夫婦関係の犠牲に
 なっており、直截に母親を支える役割を担わさ
 れてしまったことが不登校の契機ではないか、
 ということは容易に想定できる。ここで母親面
 接者は、客観的な立場からこうした解釈を試み
 ているが、母親はむしろその関連性を否認しよ
 うと躍起になっている。ここで母親面接者が気
 づかねばならないのは、そういった第三者的態
 度やコメントが母親に引き起こす影響である。
 母親は夫への依存を息子に置き換えているが、
 それは基本的に当てにならない、頼りになら
 ない夫への失望に基づいている。少なくとも母
 親から見た場合、現状を招いたのは子どもの父
 である夫であり、夫こそが責めを負うべきであ
 って自分ではない。ところが冷静な第三者的母
 親面接者が自らの罪悪感を刺激するコメントを
 したことで、母親の夫に対する不満は担当者
 である母親面接者にも敷衍し、面接の中断とい
 う事態に陥ったのである。

この場合も母親面接者は、図らずも母親の夫
 に代わって母親を訴追する役割を担ってしまっ
 ている。このように、本来目の前にいるクライ
 エントに共感的に応答すべき母親面接者が、別
 の関係者の役割を担われる時、面接の中断とい
 った事態が起きやすい。先の場合とは異なり、
 これは夫であったり、養育の先輩であったり、
 要するに母親以外の大人である。従ってそう
 いった役割を担ってしまうのは、初学者とい
 うよりは年配のカウンセラーに起こりやすい事
 態であり、とりわけ社会人経験を経て大学院に
 再入学した、年配の初学者が陥りやすい陥穽
 である。何をしてもまず母親面接者が気をつけ

ねばならないのは、全体の構造に配慮しつつも、
 目の前にいるクライアントである母親に共感す
 るということであり、それができない時は何が
 妨げになっているか、どのようなダイナミズム
 が動いているかを振り返る必要がある。考える
 べきはいかに母親を説得すべきか、いかに洞察
 して貫うかではなく、「何が母親をこうまで頑
 なにさせているか」、「どうして母親は母親と
 して十分機能できていないのか」を慮ること
 である。

事例④

5年生になって風邪を契機に三日間学校を休
 んだ息子が、今後不登校にならないかと心配で
 面接室を訪れた母親は、これまで育て難かった
 息子の生育史を一生懸命語った。「4歳の時に
 初めて保育園に行った時には、私と離れるのを
 嫌がって一週間泣きましたし、小学校入学の時
 は皆嬉しそうにランドセル背負って校門の前で
 写真をとりたいがのに、この子は一人でパイと
 帰ってしまうし、この間もく僕なんか生みた
 くなかったんちゃうの？>なんて言うんです…
 やっぱり異常なんじゃないか？」一方、子ども
 担当者がプレイルームで「今日はどうしてきた
 の？」と聞くと、子どもは「お母さんが行こう
 って…僕、友達と遊びたいのに…」と答えた。
 母親面接者と子ども担当者は、モチベーション
 の低い子どものプレイをどう繋ごうかと、毎回
 面接終了後、長時間話し合うのだった。

いささか戯画的な状況だが、これに類する光
 景はしばしば見聞きする。問題の本質は、ここ
 まで募っている母親の不安が、いったい何に由
 来しているのかを母親面接において探究するこ
 とにある筈だが、母子並行面接の構造を維持し
 ようとするあまり、さほど大きな問題のない(あ
 るいは自力で問題を解決する力のある)子ども

のモチベーションを上げることに、母親面接者、子ども担当者双方が躍起になるといった状況は、特に初学者同士が並行面接を組んだ場合には起こりやすい。母親面接者、子ども担当者共に、自らの面接やプレイの継続を望むからで、それに子どもの「問題」を入場券に、相談に来たい母親のほぼ無意識的な願望が相俟って、共謀関係が成立するからである。このような場合、子どもはいい迷惑であって、母親の面接に付き合わされる形で来談し続ける場合も少なくない。「別に僕は来たくない」と言える子もいるし、「お母さんのために来てるんだ」とはっきり言明する力のある子どももいなくはないが、多くは母親のために渋々来談する。面接の後で、子どものプレイの「象徴的意味」を議論し合う母親面接者、子ども担当者の姿を見ていると、不謹慎ながら子どもに「もう来なくていいよ」とこっそり耳打ちしてあげたくなる。面接の目的は単なる継続ではないし、火のない所に火をつけることでもない。何のために、誰の面接を行っているのか、どちらに向かおうとしているのか、時に見失うことはあるにしても、そういった自問なしに継続だけを目的とした面接を心理療法と呼ぶのは間違いである。こういった事例では、母親面接者の猛省を促したい。

事例⑥

小学2年の娘のチックを主訴に現れた母は、面接開始当初から「私のことはいいんです、子供さえ元気になれば…」と逃げ腰で、しばしば面接を休んだ。子どもと子ども担当者の関係は良好で、なかなか意味深いプレイが展開しているのだが、母親の都合による中断がしばしば起こり、その度に深まりかけたプレイも足止め状態に陥る。業を煮やした子ども担当者は、母親面接者に継続的な来談を促してくれるよう直訴するが、母親面接者は母親のモチベーションの

低さを考えると、なかなか強いことが言えず、やがて面接は母子共に中断してしまった。

これも頻繁に起こる事例である。子どものプレイセラピーが中心となって展開しているが、母親と母親面接者の関係がなかなか深まらず、結果的に子どもの展開を支え切れない。このような事態が起こる一番の原因は、母親の側に子どもの変化に対する心の準備ができていない、ということにある。またその必然性をあまり感じておらず、要するに母親は無意識的に、現状維持を望んでいる場合が多い。ここでそんな母親を訴追したくなる子ども担当者の気持ちも分らなくはないが、母親面接者としてはこういった文字通りの「抵抗」の背後にあるものを探る必要がある。ただし、この段階でそれが語られることは稀であるし、往々にしてそれを探ろうとすれば、さらなる抵抗に出会うのがオチである。

むしろ实际的で有効な手段は、「急がば回れ」の教訓、あるいは「北風と太陽」の寓話が教える手立てに従うことである。子どもの様子に気を配らず、自らの都合を優先させ、面接からも逃げ腰の母親のあり方を積極的に認め、必要最低限の情報だけを求める。母親の現在のあり方を決して非難せず、むしろより積極的に自分の都合を優先するよう示唆する。そうすることで、母親の味方になり、懐に飛び込むのである。その上で母親の言葉に耳を傾ければ、なぜ子どもの世話が嫌なのか、なぜ子育てに拒否的にしか関われないのか、その本音の部分が聞こえてくるはずである。そこでの共感的理解の上に立って、では具体的に何ができるのか、最低限何をしてあげばよいのか、を話し合えば、自ずと結論は出てこよう。恐らくは、「とりあえず連れてくるからお任せします」といった、母子並行面接では最も望ましい治療構造が確立するはず

である。安定した母子並行面接のためには、まずは安定した母親-母親面接者関係の確立が重要課題なのである。

＜母子並行面接構造が持つ「四者性」について＞

ところで、ある程度の実験を持つ心理臨床家や、とりわけユング派の治療関係の見方に精通している研究者なら、上述の構造図がある種の連想を呼び起こすであろうと想像するに難くない。それは言わずと知れたダブル・ペリカンの図、あるいは『転移の心理学』において議論されている「四者性」である。このアナロジーは、この小論の枠を超えた、実に豊かな連想を引き起こすが、ここでは紙面の都合もあり、簡単に紹介するにとどめる。

マリオ・ヤコービ（1985）は「患者と分析家の間で起こる、ある種の転移の形を知るモデル」として、ユングの『心理学と錬金術』で豊富に取り上げられている「対立物の結合」をモチーフとした数々の図版（次頁参照）をもとに、下記のような図を提示している（図2）。

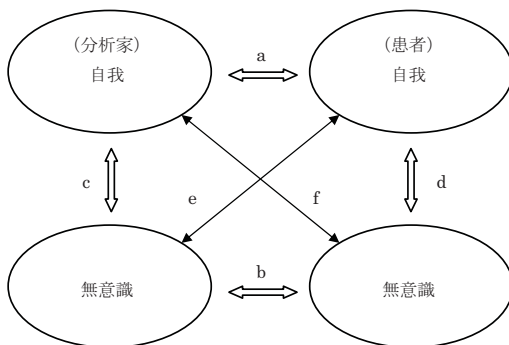


図2 分析家患者関係のユング的モデル

これは分析家と患者の二者関係を基盤にした図ではあるが、自我と無意識の切っても切れない関係（ユング派では自我自己軸と呼ばれる）と母子関係のそれ、さらに理性的な自我と母親や母親面接者に比した時の子どもや子ども担当

者のよりプリミティブな側面を勘案するなら、前述の図式とこの図との類似性は明らかであろう。ここで面接の契約は通常 a において成立する（四者関係に置き換えるなら、母親と母親面接者の間）が、患者の無意識的な期待が分析家の自我に及ぼす影響 f（通常「転移」と呼ばれる）や、分析家の無意識的な期待が患者の自我に及ぼす影響 e（通常「逆転移」と呼ばれる）が、治療関係を複雑にすることは言うまでもない。これがアナロジーのもとに、すでに見てきたような子どもから母親面接者、あるいは子ども担当者と母親との間のやり取りを考える上で、きわめて示唆的であることは言を俟たない。

さらにヤコービは b で表現される無意識同士の関係についても言及している。これは神秘的関与（融即）、元型への囚われといった事態に関連するが、母子並行面接とのアナロジーから考察すると、母親や母親面接者の意図を超えた、深い次元で子どもたちのプレイが展開している場合を連想させる。通常、分析関係で神秘的関与が起きている場合、「彼ら（分析家と患者）は、無意識のうちに一緒に行動化してしまう」とヤコービは述べている。この際、引き起こされる行動は治療的でも非治療的でも、反治療的でもありうる。これを母子並行面接に置き換えて考えると、四者がある種の方向に向けて無自覚に流されてしまうという事態に対応する。この事態に対して、どこまで、どのように自覚的に対処するのか、しないのか。一見進展しているように見える母子並行面接全体のこうした動きに対して、それが治療的な含意を持っているのか、あるいは反治療的な含意を持っているのか、見極めることができるのは、実はこうした構造を理解している母親面接者だけである。何かしら圧倒的な力で子どもたちのプレイセラピーが展開している時、それが建設の方向を向いているのか破壊の方向を向いているのか、常

に自覚的に見極めようとするのが母親面接者の務めである。言うまでもなくこれは、上述の「母親面接者はこうした構造を知っておくということであって、構造全体をコントロールすることではない」というテーゼの焼き直しである。

ところでこういった含意を感じ取った母親面接者は、どうすれば良いのだろうか。とりわけ反治療的な含意、破壊的な方向に展開していることを看取した母親面接者は、どう対処すべきだろうか。再びヤコービのコメントに戻ると、彼はこう述べている。「ユング派の分析家は、誰でも直すのは自分でないことを知っている。救いは患者の態度の変容、その無意識との正しい関わりを通して訪れる、ということである。」これを上記のアナロジーに置き換えれば、こうした事態の「救い」は母親面接者や子ども担当者（分析家）ではなく、「母親（患者）の態度の変容、その子ども（無意識）との正しい関わりを通して訪れる」ということになろうか。

このようにアナロジーに基づくさまざまな「知恵」は、右に掲げた同じモチーフの図版を眺めることによって、さらに豊かに連想されてゆくに違いない。試みに幾つかの図版を筆者の連想と共に掲げてみたい（Alexander Roob:2001、C.G.ユング:1976）。

まず、右図（図3）は「光と影」をモチーフに描かれた図である。左には「権威ある聖典」、右には「理性」の記述があり、また右下に向けて「感覚」に光が差している。右の陽光の人物の足元には双頭のカラスと思しき鳥が描かれ、右の三日月を額に頂く人物は同じように双頭の孔雀を足元に置いている。

親面接者の位置にある陽光の人から、母親の位置にある影の人に光が向けられ、その反射光は子ども担当者の位置にある小さな器に注ぐ。他方、第三の光は地中の子どもの位置にある土中深く射し込み、暗所を照らす。この図は、親



図3

面接者のまなざしを、まさに光の形で見事に指し示している、と言えるのではないだろうか。

この図以下4枚（次頁）は、「対立物の結合」という同じモチーフのもとに描かれた図である。図4で注目したいのは、前図同様、双頭の鳥が描かれているという点である。王と女王、太陽と月の対照性はまさに対立物を表わしているが、月の位置から、前図とは左右逆転の構図になっていることが分かる。人間的なるものを上半分に、動物的なるものを下半分に描き、冥界と人間界を行き来し、脱皮することで変容を象徴する生き物、蛇がそれを繋いでいる。

黒鳥と紅鳥という対立物が、人間界においてキメラとでも言うべき双頭の鳥に融合しているのは、葛藤する事態の解決が、王と女王の位置にある親面接において実現することを示唆しているとは言えないだろうか（図4）。

その同じモチーフで描かれたと思われるのが、次の図5である。ラテン語で「結合（性交）」



図4



図5

と銘打たれたこの図が、前図と同じモチーフを維持しているのは、「父なる太陽」と「母なる月」の足元に見える鳥の足によっても明らかである。

興味深いのは、両者の共同作業によって作られるのがキメラではなく、フラスコ内の母に抱かれる子である点である。動物的なものを隠すことによって、錬金術的な母性を守られた空間内に実現する…母親面接の一つの在り方を暗示してはいないだろうか。

次の図6は、やはり王と女王、太陽と月のモチーフが描かれ、両者の共同作業が示唆されている。ただし「哲学者の沐浴」というタイトルからも想定されるように、ここでは動物性は完全に影を潜め、わずかに鷲ともカラスともとれる天空からの鳥にその名残を残すのみである。もっともこの裸の両者の沐浴は、浴槽内の結合を暗示しており、文字通りそれを鳥瞰する鳥が印象的である。

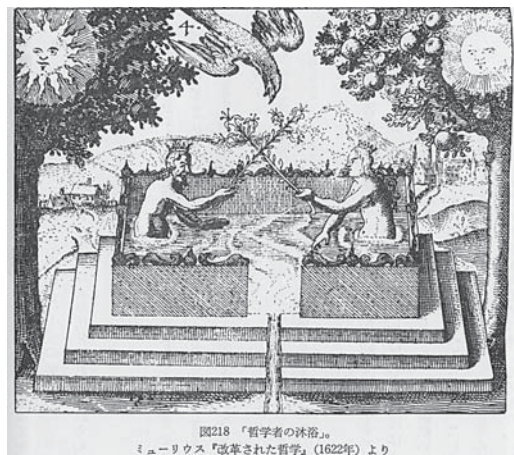


図6

そうしてその正体が示唆されているのが、最後の図7である。二人の哲学者の頭上に位置するのは、コウノトリと見紛う白い鳥であり、浴槽内で結合するのは魂と肉体。まるで子供たちの頭を冷やすかのように哲学者たちは聖水を容器に注ぎ、その結合を準備する。



図159 魂と肉体の「結合」。錬金術の結婚の沐浴を教会風に表現したもの。
『ドゥッペリー公の《偉大なる時鐘動》(1413年)より

図7

ここで明確に示唆されている四者のありようが、改めて母子並行面接で各々が果たすべき役割を暗示しているのではないだろうか。曰く、母親と母親面接者は哲学者の知恵とまなごしを持って子どもと子ども担当者の容器（プレイルーム）内の作業を助け、そこから生み出されるもの（金）に最大限の敬意を払う、ということである。

錬金術の象徴から導き出される意味は、師の金言や箴言から導き出されるものと本質的には変わらない。常にそれと取り組み、考え続けるそのプロセスに、ありうべき意味が付置されるのである。問い続けること、探究し続けること、そのプロセス自体が心理療法であって、導き出される意味はその過程における副産物でしかない。それゆえここで述べた示唆も、常に儚い一時的な解決であり、その時その瞬間の意味にすぎないことを自覚しておく必要はあろう。

<母親面接者の姿勢>

これまで述べてきたように、母子並行面接に

おける母親面接者が果たすべき役割は、一筋縄ではいかない多面的で複合的なものである。と同時に、極めてシンプルでもある。なぜなら、目の前のクライアントである母親に対して、子どもと子ども担当者のプレイセラピーに対して、さらには母子並行面接という治療構造全体に対して、「親のごとくあれ」という一言で済ませてしまうとも言えるからである。問題を複雑にしているのは、「親」の機能が多面的で複合的だということにある。

ただ、シンプルにこのように記す時、多くの院生たちが勘違いしてしまうことを、筆者は幾度となく体験している。たとえ博士課程まで進んで勉学に励んだとしても、子どもを育てたこともないような若輩の院生が、文献に基づいて母親に「教育的指導」などとは笑止千万である。すべからく、部外者が思いつくような指導助言は、すでにとっくに母親が知っているものと考えた方がよい。知ってはいるが、諸般の事情で実践できないのである。それを指摘することは、端的に母親に対する非難以外の何物でもない。

生身の人間の命を、責任を持って預かっているという意味では、母親は子育てしているというだけで、誰よりも優れた臨床心理学者である¹⁾。そういった尊重と畏敬の念がないままに、母親に指導助言する等というお題目は、失礼極まりない。よしんばその養育に幾ばくかの欠点が見えたとしても、周囲の環境が、あるいは母親自身の持つ内的なわだかまりが、母親を母親として十分に機能できなくさせているだけなのである。母親面接者として我々が先ずせねばならないのは、そういった母親の協力者として、その訴えや愚痴、わだかまりを黙って聴くこと、そう言わざるを得ない、そう振る舞わざるを得ない背景をしっかりと聴き取ること、その共感的理解の上に立って、願わくば、子育てという難業の一端を担わせて頂くこと、最低限そうし

た姿勢と心構えを持つことが母親面接の要件であり、母親面接者の基本的姿勢である。

最後に言わずもがなではあるが、以下に筆者の考える母親面接の基本姿勢を、箇条書きでまとめとして掲げることとする。

- ①子育ての主体は母親である。一生子女の面倒を見る気がないなら、それに取って代わろうとしてはならない。
- ②母親が母親として、自信を持って子育てに当たる気になってもらうのが、母親面接の要諦である。その際、必要なのは批判ではなく、励ましと賞賛である。
- ③母親の現在の在り方は、もろもろの必然の結果である。それを知らずして、母親のみを変えようとしてはならない。
- ④基本的に母親に必要な「教育的指導」はない。全ての母親は、自らの欠点を自覚していると知るべきである。
- ⑤治療者が思いつく「アドバイス」は、基本的にすでに母親が知りながら、できないことであると覚悟しておくべきである。いかなる「アドバイス」も、母親には非難として受け取られる。
- ⑥どうしてもアドバイスを求められるなら、自

ら答えを見つけて貰うのが良い。その際、「どういったことなら、できそうですか？」と問う。次回はその成果を話題にすることができる。

- ⑦決して諦めないこと。これが母親面接に限らず、全ての心理臨床の基本姿勢である。

注

- 1) 翻って、子育て経験を持つ院生、出産と子育てのために自らのキャリアを中断させねばならなかった院生たちは、臨床経験の中断を悔いる必要は毛頭ない。いうまでもないことだが、自らの子育て経験こそ、何にもまして貴重な臨床経験だからである。

<文献>

- 神田橋條治 (1990) 『精神科診断面接のコツ』 岩崎学術出版
- マリオ・ヤコービ (1985) 『分析的人間関係』 (氏原寛・丹下庄一・岩堂美智子・松島恭子訳) 創元社
- C.G. ユング (1976) 『心理学と錬金術 I・II』 (池田絏一・鎌田道生訳) 人文書院
- C.G. ユング (1994) 『転移の心理学』 (林道義・磯上恵子訳) みすず書房
- Alexander Roob (2001) *Alchemy & Mysticism: The Hermetic Museum*, Taschen America Llc.

Abstract

The Practice and Implications of Mother-Child Allied Therapy

Koichi TAKAISHI

The main purpose of this article is to present the theory and method of Mother-Child allied therapy that is very popular in Japanese clinical psychology practice, and to emphasize the particular role and responsibility of the mother therapist. Mother therapists should pay attention not only to his/her client mother, but also to the unit of child-child therapist. Mother therapists should motivate both mother and child to therapy, and recognize the transferences of each person (M-Mt.Ch-ChT,M-Ch,ChT-M, etc.)

This complicated relationship is represented by the tetrad structure symbolized by the Jungian analyst/patient relationship (ed. Mario Jacoby). The pictures of the alchemy are also referenced as the meaningful connotations of this symbol and their meanings are widely discussed.

Key words : Mother-Child allied therapy, tetrad structure